

## 《研究ノート》

### 母達への<sup>レクイエム</sup>鎮魂歌

— Margaret Forster: *The Seduction of Mrs Pendlebury* (1974)<sup>1</sup>

榎本眞理子

#### 1. はじめに — 1960年代と1970年代のイギリス小説

David Lodge の有名な評論 'The Novelist at the Crossroads' (1969)、Angus Wilson の *No Laughing Matter* (1967)、そして John Fowles の *French Lieutenant's Woman* (1969)。この三つがいずれも 60年代に出ているという事実が象徴的に物語っているように、60年代の英国小説は、小説の自意識、つまり自らの虚構性を何らかの形で強く意識したものが主流を占めていた。今でこそ虚構性の認識は、英国小説を論じるに当たっても常識の部類に属する。しかし当時においては（ウルフ・ジョイス以来の）画期的なことであった。

そして70年代には小説のテーマは著しく広がり、また小説家達はファンタジーへの強い好みと、歴史的素材を自由に使いこなしたいという強い衝動を持つ (Bradbury 378) ようになった。'69年になると serious novel の質を高め、またそれへの人々の関心を高めようと Booker Prize が設立された。そしてテーマの拡大を反映するかのようには、1971年には V.S. Naipaul が、'74年には Nadine Gordimer が、'77年には Ruth Praver Jhabvala がそれぞれブッカー賞を受賞している。一方でアイリス・マードック、マーガレット・ドラブル、A.S. バイアット、アニタ・ブルックナー、アンジェラ・カーターなどもそれぞれ作品を発表し続けていた。

これらの小説家の陰にあって、Margaret Forster も作品を書き続けていた。しかしフォースターが注目され始めたのは比較的最近のことであり、*The Modern British Novel* (Bradbury) にも、また *The English Novel in the*

*History: 1950-1995 (Connor)* にもその名は全く出て来ない。

## 2. *The Seduction of Mrs Pendlebury* 紹介の意義

Margaret Forster の *Lady's Maid* (1991) は、Elizabeth Barrett Browning の生活をその maid の視点から描いて注目を浴びた。Hana Sambrook はこの小説を 'a realistic, disturbing picture of that endlessly fascinating period [Victoria 朝のこと]' と評している。そのフォースターの比較的初期の作品 *The Seduction of Mrs Pendlebury* (1974) は、老人問題、人間関係（隣人、夫婦等）の問題、また閉ざされた生（ヒロインは教育もなく、家庭にしか生きる場を与えられず、更に性格的な問題もある）を生きるしかない女の不幸、精神の病、クラスの問題等を含む問題作である。これまで現代イギリスの女性作家のうち比較的伝統的な手法の作家と言えばマードック、ドラブル、バイアット、ブルックナーなどが取り沙汰されてきた。これらの作家の作品は、そのいずれもが大体においてミドル・クラスの人々を中心に描くか、またはミドル・クラス的な雰囲気濃厚にたたえているという点で共通していると言ってよいだろう。たとえばマードックの *The Bell* を思い出してみよう。ヒロインのドーラは正真正銘のミドル・クラスとは言えないキャラクターであるし、またインテリというわけでもない。しかし我々にはそのドーラの肩越しに、あるいはドーラの姿をすかして、マードックの姿がはっきりと見えるのだ。たとえマードックがどんなにドーラを無邪気にふるまわせようと、我々はそのドーラを操る恐ろしく知的な作家の影がそこら中をうろついているのを感じないわけにはいかない。それどころか *The Bell* の中の空気には作家のけはいが充満していると言ってもいいほどだ。ごくおおざっぱに言って、たとえどんなキャラクターを登場させようとその扱いは大変知的で、その背後の知的な作家の存在を充分に感じさせる、というのが上に挙げた作家たちの特徴の一つであると言えよう。この点マーガレット・フォースターは明らかに異色である。インテリでもなければミドル・クラスでもないヒロインを、これほどリアルにしかも同情と共感をもって小説の中に描き出した作家は、イギリス文学の中には稀なのではないだろうか。例えばロレンスにしたところでフォースターに比べれば知的に過ぎるほどだ。筆者の言っているのはあくまでも作品世界のことであるが、フォースターは本編のヒロイ

ン、Rose にぴったりと寄り添うことで、Jane Austen の天才を評して John Bayley の言った‘irresponsibility’ (Bayley 1-20) を半ば達成し得ているとも見られるのではないだろうか。ただしフォースターによって我々の前に提示される世界は、大変暗く、閉ざされた世界であり、そこがオースティンとは大いに異なるのだが。

手法が実験的なわけでもなければ、描き出される世界がインテリのそれでもない。教育もない、ミドル・クラスとワーキング・クラスの境界線のあたりに生きるヒロインを中心にすえ、その家庭生活を淡々と描いていく。これといったドラマらしいドラマもないので、一見したところ人目をひくものではない。しかしこの作品は、後のフォースターを読み解く手掛かりになるとともに、現代イギリス小説にあまり取り上げられることのない——従って我々外国人にはなかなかつぶさに知る機会のない——、教育もなければ知的でもない、一介の庶民の生活を描いた点でも、実は紹介する意味のあるものと言えよう。そしてそれは我々にとってもそう遠い世界ではない。なぜならこの作品のヒロイン、つまり作家フォースターの母親世代の抱える問題（生きる世界の狭さ）は、取りも直さず我々の母親世代の問題ともほぼ共通するからだ。ここで「我々」と言ったのは、（何世代も続いているエリート階級は別として）社会的 mobility の大きい日本に今現在、成・壮年期を生きている、筆者を含む、平均的日本人ということである。

### 3. 作品紹介

教育もなく、非社交的で、知的にも感情的にも狭い精神生活を送ることを余儀なくされている Rose Pendlebury。ロンドン近郊 Islington の Rawlinson Road は、ミドル・クラスの比較的若い人々の住んでいる通りである。ローズ自身は気が付いていないことだが、そこではペンドルベリー夫妻だけが異色の存在なのだ。自身もワーキング・クラスの出身であるフォースターは、しかしローズにも十分共感を抱えていることが、この小説の端々から感じられる。

息子・フランクは成績もよく、気立てもよく、ローズのご自慢の息子だった。しかしそのフランクも 18 の年に「仕事をさがして」オーストラリアへと旅立ち、そのまま彼の地に住み着いてしまった。医者の娘で自身も看護婦の仕事を

している Veronica と結婚し、子供も生まれている。

後に残されたローズには、年老いた夫 Stanley を口やかましくせめたてる以外にこれといった楽しみもない。年金生活者のための社交の場、「クラブ」に出掛ける以外あまり家を留守にすることもない夫の存在は、家事をきちんとやりたいローズにとっては単なる邪魔者でしかない。ローズは自分は「まともな生活をしている」と信じて疑わない。たとえ服につけてしまった染みをこすっているつもりで、まるで見当違いなところをこすってしようとも。フランクの手紙に返事を書くことが大きなストレスで大騒ぎして疲れ果てようとも。「社交なんて大嫌い」なので、近所の人に挨拶されても無視しているという実態があろうとも。それでもペンドルベリー夫人にとっては世の中はあくまでも彼女中心に回っているのだ。そんな天下無敵のペンドルベリー夫人を、Alice Oram はあやうく破壊しそうになる。それも憎しみではなく愛情を持つことによって。

ローズには、隣に引っ越して来たオーラム家の、18カ月の Amy はことさらかわいく思われる。ローズが娘の Ellen を事故（枕で窒息死）でなくしたのは、奇しくもエレンが18カ月のときだったのだ。18カ月のエイミーは18カ月で死んだ幼いエレンの身代わり、そしてエイミーの母のアリスは、生きていたらもう子供を持つ年齢になっていたはずのエレンの身代わりなのだ。最初ローズはエイミーをかわいがることで、断ち切られた母としての思いの続きを体験する。幼女のかわいらしさを存分に楽しむ。それからアリスからの愛に答え、彼女を通じて母—娘関係を疑似体験する。アリスの母はなくなっているのであり、アリスの方でも単にローズを社交的にしてやりたい、という思いだけでなく、母親のような存在を求める気持ちもあったのかも知れない。しかしそれは決して楽しいばかりのものではなかった。ちょうど本物の母—娘関係がそうであるように、葛藤や罪の意識を伴わざるを得ない、苦渋に満ちた体験なのだ。森瑤子は書いている。「愛とは決して楽しい感情ではない。むしろ苦しい感情なのだ」と。

The white net curtains moved slightly in the breeze coming through the inch or two of open window, opened at such cost, with such tuggings and

pullings, never again to be satisfactorily closed. Such was the price she paid, these days, for a bit of fresh air. When the wind snaked through in the winter she'd have to fill the crack up with newspaper where it would rot and discolour and be disgusting to remove in the following spring. (7)

上に引用したのはこの小説の冒頭の部分である。ここからも分かるように、マーガレット・フォスターは、何ということもないイギリスの、ごく普通の生活を実に巧みに描き出す。白いネット・カーテンのそよ風に揺れる様子、苦勞して力いっぱい引っ張り上げてやっと開く引き上げ式の重い窓。そして開いたはいいが、今度はどこをどう引っ張ってもたたいても閉まらなくなり、仕方なくすきま風よけにつっこまれる新聞紙。それが一冬過ぎるころには色も褪せて行く…。イギリスで少しでも似たような経験をした人にとっては、文字通り目に浮かぶような光景である。最初の数ページの描写から、どうやらヴィクトリア朝のテラス・ハウスかセミ・デタッチト・ハウスに住むらしいペンドルベリー夫妻には、家を現代風（窓を大きくし、採光、風通しをよくし、また効率のよいボイラーを入れたり、強力なセントラル・ヒーティング・システムを導入するなど）にする経済的なゆとりがなく、旧態依然とした家に住み続けていることが分かる。また道行く人々の視線をあまり気にせず、カーテンも引かずに平気で家庭の団欒を楽しんだりするという、イギリス人にとってごく普通の生活が、ローズには信じられない。また「通りでほほ笑みかけられたり、大声で挨拶されたりすると、彼女はいつも気が動転してしまう」のであり、「そういうことは近所付き合いというものとは何の関係もないのであって、だからこそ彼女は自分に向けられるその類いのものを、いつも無視し続けて来た」のだという。(17) このようにローズは非社会的で教育もなく、潔癖だが非常に自己満足的な、まもなく70に手が届こうという老婦人である。精神的に未成熟で何でも新しいことには大きなストレスを感じ、ときおりカッとして怒りの発作を起こす。しかし夫のスタンリーはそんな彼女のことを基本的にはよく理解し、大らかに受け止め、支えている。この二人のやりとり、ことにローズがスタンリーをやりこめる様は傑作である。教育がないとは言え、夫をやりこめる舌峰の鋭さにおいては、ローズはどこの夫人にもひけをとらない。

ローズが7歳のときから心の底に抱いて来た恐怖心は次のように描かれている。

There had never been any telling when this vision of her own mortality would strike. If anything, she had it worst when she was happy. She remembered particularly the day Stanley had said he loved her and asked her to marry him and her happiness — such a physical ache of pleasure — had been pierced by a terror so acute that she had clung to him and cried. He had been amused. She couldn't make him see how happiness was so near tragedy, she couldn't tell him how afraid it made her. (188)

この部分や、その後の妄想を抱く様などから察するに、ローズの心の病は分裂病のように思われるが、小説中の記述だけからは正確な判断はつかない。一つだけ確実に言えることは、ローズは明らかに精神を病んでいるということである。そして二人の出会いの時点で、スタンリーはそれを理解し損なったのだ。あるいは彼にそれが分からなかったことがむしろ幸いして、ローズは70近くになるまで何とか本格的に発病することもなく暮らして来られたという可能性もあるのかもしれない。しかしローズがいざ本格的に精神を病み始めてからは、「何事にも動じない」スタンリーの大らかさは却ってあだとなる。それは一つにはいわば「見て見ぬふりの心理学」(スタイナー 54) となってあらわれる。隣人のアリスまでが異常に気付き、「医者にみせるべきだ」というのに「いや、たいしたことじゃない。気がふさぐことは誰にだってある」と言い張る事なかれ主義である。そのことが病の悪化に拍車をかけている。それがもし分裂病であるなら、周知のように、早期発見、早期治療によってほとんど百パーセント近く完治が可能である。しかし放っておいてはよくなるものもよくなる。また 'I'm her only salvation,' という、力強い愛情宣言ととれなくもないスタンリーの言葉にも問題なしとしない。家庭内暴力や近親姦の被害者は、往々にしてその悲惨なはずの状況から逃れようとしな。第三者には信じられないことだが、こういう場合にはその暴力等の被害者が「幼い万能感」(斎藤 192) の持ち主であることが往々にしてあるという。つまり自分こそがその気の毒な

人（いわば加害者）を救えるのだ、と思い込んでしまっていて、何度ひどい目に遭っても抜け出そうとしないというのだ。その結果客観的に判断したり冷静に打開策を見いだしたりすることができず、感情的に involve されるだけで悪循環を繰り返すという。スタンリーがしていることも、ほぼこれに近いように思われる。彼の思い込みのためにローズは適切な治療が受けられず、そのために苦しんでいることは明らかなのだ。

‘The memory of how cruel they [her family] had all been to her could still make her cry’ (189-190) と、ローズの子供時代が不幸なものであったことも語られている。ワーキング・クラス出身のフォースターは、学校に通うようになって食欲に本を読むようになったが、それは「家ではあまり喜ばれ」ず、また「兄や妹とあまり仲がよくなかったために、ひとりぼっちで過ごす」ことが多かった (Skeels) ということなので、このローズの子供時代はいくぶんかは作者自身の子供時代を反映しているのかもしれない。またローズの家族が、最近日本にも潜在的に沢山存在するという「機能不全家族」に近いものであった可能性も大いに考えられる。目の前で家族がケンカし、また和解するという様子を見ていないと、その子供は他人に対し、葛藤を含む普通の付き合いが出来ず、非社会的になるという。(岩崎)

フォースターは人間の孤独——人と人が心を通わせ合うことがいかに難しいことか、お互いに理解し合ったつもりで、それが相互誤解の産物であったりする——という、古くて新しいテーマを繰り返し扱っている。また、サムブルックは *Contemporary Novelists* の中でフォースターについて次のように述べている。

In all of [her novels] she is preoccupied with human relationships or, to put it more precisely, with the impact of one person on another, with the possibility — or impossibility — of any real change in someone’s character and out-look on life through emotional involvement with someone else. (Sambrook 316)

このことは *The Seduction of Mrs Pendlebury* にもあてはまる。フォースタ

ーは、「人間関係はそれがいかに強力なものであっても、人を根本的に変えることなど不可能なのであり、人を弄ぶのは危険なことなのだ」とも主張しているのである。(Sambrook 316)

前述したように、ローズを愛することによって追い詰めるのは、隣りに越して来た若い母親・アリスである。そのアリス自身も決して落ち着いた、バランスのとれた人格の持ち主ではない。芯は強いがとても内気で、それほど社交的というわけでもない。しょっちゅう漠然とした不安感を抱いている。また、友人との間に適切な距離が保てない。そしていやしくも友人となるからにはお互いに完璧に involve され、その友人とともに泣いたり苦しんだりすべきなのだと思います。「だから誰と友人になるのかは慎重に考えなければならない」と。庭で無心に遊ぶエイミー。そのエイミーに、幼い子供の好きなペンドルベリー夫人は二階からほほ笑みかける。隣に新しい人々が引っ越して来て以来、ローズはもう三週間も寝室の窓ガラスを磨き続けているのだ。フォースターは次のように書いている。

Watching the chubby hands grasp the flowers and the frown of concentration on the small face as the child tried to pick them, Mrs Pendlebury smiled. She liked them that age, just learning to do everything and yet babyish enough to cuddle and cradle in your arms. (19)

社交的と言わないまでも、ローズが普通に人との付き合いのできる老婦人であるならばいい。「彼女は子供好きなのだ」ということですむ。しかしローズがどういう性格の持ち主かを思い出してみると、ことはもっと深刻であることに読者はいやでも気付かざるをえない。叱り飛ばしてある程度思いどおりに動かせる(つमりの)夫を別とすれば、彼女が心置きなくつきあえる(自分以外の)他人とは、抱き締めて可愛がっても反抗したりしない幼児どまりだということ、この omnipotent な語り手は、我々に語っているわけなのだから。ともあれ、こうして幼児を仲立ちに、ローズとアリスの付き合いが始まる。最初は庭での立ち話。次には病気でねこんだローズにさまざまなお見舞いが届く。美しい貝殻が届く。‘Funny sort of present,’ と言い、‘Seems silly’ とまで言う



スタンリーに、ローズは「こんなにきれいな貝を見たことある？」と言う。そして「もちろんあるさ。…そんなもの海岸にいくらだって転がっているさ」と答えるスタンリーに、ローズは「あなたには想像力ってものがまるでないのね、あっちへ行って」と叫ぶのだった。そして彼女はこんなに人が自分を愛し、気遣ってくれるなんて、「まったく求愛されているようなものだ」と思うのだった。

それからアリス・オーラムのところでコーヒーを飲みながらお喋りを楽しむようになり、いつしかそれが水曜の朝ごとの習慣となって行く。ローズがアリスと付き合うようになったのは、アリスがローズ以上におずおずとしていたので、ローズがリラックスして彼女と話げできたからなのだった。今まで誰にも話す気になれなかった、幼くして死んだエレンのことも、なぜかアリスには何のこだわりもなく口にするのができるのだった。

ローズを「愛している」というアリスではあるが、決してアリスの方でも常に素直にローズと付き合いえたわけではない。ローズを少しは社交的にしてやろう、と努力しつつも、その甲斐あって彼女にも友達が増え、アリスがローズと立ち話をしているときに、シャーロットという社交的な近所の人に「庭を見にいらっしゃらない」とローズをさらわれていたりすると、「まるで恋人のよう」に嫉妬に似た思いを味わったりする。また、アリスが流産してしまったとき、いくら「あなたは関係ない」と言われてもまるで自分のせいであるかのように悩み苦しむ、(それまで人がエレンのことで「お気の毒に」などと言ってくれても相手の誠意を全く信じられなかったのが)「苦しみに目を開かされる思いがする。彼女のために心から苦しむ、‘She felt so helpless, so unable to communicate her sympathy, to do the right thing.... how she’d longed to cry with [Tony] and share his burden and how much more she would long to do it with Alice’ (206)と願う。ローズも目が覚め、やっと本当にアリスと心が通い合い、この二人は本物の精神的な母—娘となれるのかという読者の期待は、しかしあっさり裏切られる。上に引用した感激的なローズ改心の場のすぐ次、16章の冒頭は、次のような覚めたアリスの視点から語られているのだ。

Lying in bed looking at Mrs Pendlebury’s flowers and reading the mes-

sage Alice thought how they meant nothing at all to her. 'Hoping these can say what words cannot'? Well, no, they couldn't. They said nothing at all to her. She felt a hardening in her attitude towards Mrs P. which she knew was unfair but which was real all the same. (206)

いやむしろ、この二人の間の関係が、心が通い合ってそして‘they lived happily ever after,’ などという単純でなまやさしいしろものではないだけに、ローズとアリスは立派に母—娘関係を生きていると言えるのかもしれない。それも葛藤や誤解や憎しみをも含む、現実的な、全幅のものとして。ローズはアリスのお陰で近所の他の人々とも付き合うようになり、これまで毛嫌いしていたシャーロットとさえも近所付き合いを始める。baby-sitting をめぐって少々ぎくしゃくしたりはしたが、それでも娘がわりのアリス、孫がわりのエイミーとしょっちゅう行き来し、ローズの人生はすっかり明るくなっていた。

しかしそこに大変なことが生じた。前々から息子・フランクの一家をオーストラリアに尋ねて行くことが、ペンドルベリー夫妻にとっては見果てぬ夢であった。あるときフランクが本当に飛行機の切符を彼らに送ってよこす。夫妻は一世一代の大決心をし、大変な興奮のうちについにオーストラリア行きを決めたのだ。一悶着ののち鍵もアリスにあずけ、留守中の家の管理も頼んだ。ところがいざ出発、という当日の10月1日の朝になって、義理の娘・ヴェロニカが大怪我をしたので訪問を延期してほしい、という連絡がオーストラリアから入ったのだ。かくしてストレスと恐怖心を克服しての大決心も水の泡となってしまった。この挫折に耐え切れず、ローズはすっかり参って寝込んでしまう。そうこうするうちに、日に何度も何時間も停電するようになる。時は冬。オーラム家からのローソクの差し入れも断り、援助の手も拒み、暗い中でじっと息をひそめる70の老夫婦。そして…。

ローズはヴェロニカが怪我をしたということが信じられず、自分のオーストラリア行きを阻むための嘘だと考える。そしていくらスタンリーがなだめても耳を貸さない。揚げ句にスタンリーにまで憎しみの目をむける。一月になると夜ごとにアリスたちは隣家から聞こえてくる叫び声と激しい物音を耳にするようになる。毎晩夜の10時頃、隣家の壁——ちょうどオーラム家でソファをお

いているあたり——に何かがぶつかる恐ろしい音が聞こえるのだ。悪態をつくのも聞こえる。悪いときには悪いことが重なるもので、2月になると電力会社のストライキのため、停電が始まる。最初は短時間だったのが、ついには毎日のように三時間ずつ、三回も停電するようになる。すると壁の音は止んで、代わりに何時間もすすり泣きが聞こえるようになる。ろくに暖房もない旧式の家で、電気ヒーターも使えず、暗闇と凍えるような寒さの中にいるペンドルベリー夫妻。彼らを心配して、アリスは夫 Tony にローソクとパラフィン・ランプを届けさせるが、スタンリーは感謝するだけで、それを受け取らない。その晩庭にさまよい出て来たローズが「もうたくさん」、「どうして私たちを放っておいてくれないの?」と何度も何度も叫ぶのを、アリスとトニーは耳にする。彼女はまたローズが「あしたは警察を呼ぶんだからね」というのも耳にし、一体何事かと疑問に思うのだった。ローズの心はすっかり狂ってしまっていて、被害妄想にかられているのだ。そしてトニーとアリスが勝手に家に入り込んで、ものを壊したり、盗んだり、フランクからの手紙をいじくりまわしたりしている、と思い込んでいる。それで「警察を呼ぶ」と言っているわけなのだ。ローズは現実を直視することが辛くて出来ないために、一番彼女と感情的につながりの深い人であるアリスの、その夫（アリス自身を首謀者に仕立て上げるのは、さすがのローズも気が引けて出来ない）を悪者に仕立て上げ、彼にすべての悪感情を向けることで、今にも崩れ落ちそうな自我を守ろうとしているのだろう。しかしスタンリーにはそのへんの事情は分からないし、察する気もない。

‘Stop it!’ said Stanley, almost growling with anger. ‘Do you hear me? Now shut your mouth, I want no more of that talk, it’s wicked and dangerous. I don’t know what idea you’ve got into your head but you can get it out, now.’ (244)

このようにスタンリーはローズを怒鳴りつけ、だまらせてしまう。そのあとローズは床に入ってから延々と泣き続け、スタンリーの同情心もしまいにはうせてしまい、この泣き声を止めるためだったら何でもしよう、殴るか、クッションで頭を押さえ付けるかしょうか、とまで思い詰めるのだった。この晩は

さすがのスタンリーもあれこれ思い悩んで眠れない。感情的なことのすべてを蔑視し、また女は感情的なもの、と決めつける。そういう点でスタンリーは(洋の東西を問わず)、古いタイプの男の *everyman* である。冷静で客観的な、バランスのとれた精神の持ち主だからではない。むしろ常に理性のみを頼みとしようとするために、感情面の発達が遅れ、そのために実はカッとしやすく、感情をうまくコントロールできない。そしてその事実を直視出来ないために、感情的なことをすべて女に *project* し、感情的なことのすべてからひたすら逃げ回ろうとする、いわば青髭症候群。スタンリーはその青髭症候群に苦しむ男の一人なのだ。そのことが、ローズのことを心配するアリスに対するスタンリーの反応からもよく分かる。「心配はありがたいが嘴をつっこまないでくれ。あなたは親戚でもなんでもないのだから」と言うスタンリーに、アリスは「どうして親戚である必要があるかしら?… 私は(友人として、隣人としての)愛情から彼女のことを気にかけているのよ」と答える。そのあとにはスタンリーの視点から、次のように書かれているのだ。

Stanley was more embarrassed than he had ever been in his entire life. This young woman had got carried away, there was no mistake about that.... She was scarlet in the face, half crying, and talking all this stuff about loving Rose — he didn't know which way to look.... he wished there was a man about to handle her. (272)

女は感情的なもの、そして感情的なことはまともな男・スタンリーを困惑させるだけ。こんなときには夫が彼女を家に連れ帰って自分を救うべきだ、というわけだ。

フォースター一流の、淡々として至って口当たりのよい散文で綴られた、市井の人々の日常の穏やかな暮らし。細々とした喜怒哀楽によって織り成されている、さしてドラマらしいドラマもない、平々凡々たる生活。登場人物のクラスも舞台背景も異なるとはいえ、どこかジェイン・オースティンを思わせなくもない静かな世界。穏やかな隠遁生活を営む老夫婦。それも、いかにもイギリス小説ふうの口やかましい妻と、おっとり構えた夫という組み合わせ。しかし

そういう見せかけに釣られて読み進んで行くうちに、いつかとんでもなく深い奈落の底に引きずり込まれてしまっていることに、読者は気付く。ほとんど献身的なまでに、ローズのためを思うアリス。しかし皮肉にもそのアリスの愛と気遣いこそがローズを追い詰め、狂わせてしまう。そして読者はローズの人格の崩壊の場面に行き合わせてしまうのだ。恐らくオーストラリア行きの挫折は引き金に過ぎず、たとえそれが実現していたところで、ローズはいつかアリスに恨みを抱くようになってしまったことだろう。

最初に本書を手にした読者は、リアルに描き出されたイギリスの日常生活の様子や、随所にちりばめられた登場人物同士のコミカルなやりとりを、存分に楽しめることだろう。しかしひとたび結末を知ってからの再読となると、事態は一変する。その一見何げない日常生活のさなかにも、常に通奏低音として流れているローズの自信のなさ、不安、精神世界の暗さ、死への恐怖。それらを読者はいやでも聞き取らざるを得ない。そうしてみると、この *The Seduction of Mrs Pendlebury* という小説の世界はひたすら暗い世界であることが分かってくる。ことローズに関する限り、その精神生活の貧しさ——知的にも、感情的にも——は Victoria 朝の女性に負けずとも劣らない。彼女の生きる世界は、たとえばジェイン・オースティンにならある、外の広い世界の存在を感じさせるところもない。また外の世界とのつながりもなければ社交もない、他から隔絶した世界なのだ。他からの隔絶も極めれば、そこに蓄積した莫大なエネルギーが思いもかけずほとばしり出て、劇的な地殻変動を起こす、ということも可能なわけだが、この小説の中にあるのは中途半端な隔絶でしかない。かといって広がりやの欠如を補う深さがあるというわけですらもない。禁欲的なまでに、ひたすら、出口なしに、暗いのである。唯一の救いは最後のシーンだが、これについては後述する。

はたしてこの出口なしの暗さは何なのか。筆者の結論は、この暗さこそフォースターが描き出したかったものに違いない、ということだ。13までしか教育を受けられず、自信もなく、主婦として家事を担当する以外のあらゆる生き方は最初から夢にも考えられない。人の間でもまれて社会性を身につける機会もなく、(持って生まれた性格もあるにせよ) 葛藤をも含む、ごく普通の、人との付き合いも知らないし、出来ない。「女なんだから」とまわりもそれをも

ってよしとする。イギリスでならヴィクトリア朝の女性、<sup>2</sup> さもなければ日本の現代の女性のことかと考えてしまいそうだが、筆者の知り合いのイギリス人は、「イギリスの女性の多くは、あなたがた日本人が思うほど解放されているわけでもなければ、進歩的でもない」と口をそろえて言う。現にたとえば現代イギリスの劇作家キャリル・チャーチルは『クラウド・ナイン』の第一幕をヴィクトリア朝に設定しているが、その理由の一つは、この劇の創作に協力したワーク・ショップの人々の誰もが、子供のころに親から結婚や性について、とても因習的な、ほとんどヴィクトリア朝風と言ってもいいような考え方を教えられ、その後の人生でそこから抜け出すのに大変苦勞したからだ、と書いている。(Churchill 246) スタンリーにしても、半ばは妻を支えつつも、彼女を医者に見せて適切な治療を受けさせることもせず、彼女に必要とされることを生きがいの一部としているという意味で、彼女の emotion に寄生し、彼女を精神的に——ことに感情面で——搾取しているのだ。その意味ではローズもまた最後の植民地としての女にほかならない。そしてローズは、狭い狭い世界を生きているその大勢の女の、ほんの一例に過ぎない。ローズの暗さは、年齢と国とを問わず、現代でもまだ沢山の女が、現に生きることを余儀なくされている、人生の暗さなのだ。本書はそういう女たちへの、ことに作家・フォスターの母親から上の世代の女達への鎮魂歌なのだ。ローズの人物像は、作家のワーキング・クラス出身の母をモデルにしている局面と、孤独や自信のなさ、不安と戦って来たであろう作者自身の分身という局面をも合わせ持つに違いない。ローズという人物が、頑ななまでに自己中心的でありながら、どこか憎めないのは、そういう母や、自分や、また同じように悩み苦しむ女達へのフォスターの共感ゆえであろう。

最後には「もうここにいるのはいやだ」というローズの言い分を聞き入れてスタンリーは家を売り、イーストボーンの郊外の、海に見える家に移ることとなる。人目につくことを避けて、引っ越しは夜行われる。少し長くなるが、この小説の一番最後のシーンから引用しよう。

All her life, she would live with the loss of the only person ever to like her better than she liked herself, the only person willing and able to make

her see her fellow humans as friendly and giving. The girl, Alice, had been a blessing, but she was not a saint. It was only natural that she never wanted to see her again.... There would be no reprieve. The justice of it pleaded her — she pleaded guilty and there was no reprieve.

As she got into Elsie and George's car, a sound stopped her — the sound of a very young baby crying. Rose looked up and saw the curtain move at the first-floor window and Alice in a dressing-gown appear in front of it, holding a bundle. The room behind her was brilliantly lit. She knew, from long practice, how little the person standing there could see. Hesitantly, she raised a hand and blew a kiss to the child she had not even realized existed. For a moment she waited, but there was no answering salutation. Humbly, she got in the car. It was no more than she deserved.

'I'm sure,' Alice said, turning away from the window with her ten-day-old son, 'I'm sure I saw Mrs Pendlebury getting into a car. Do you think the baby will make any difference? Do you know what I'm going to do? Tomorrow I'm going to go round and knock on the door and act as though nothing had happened and show him to her. That's what I'm going to do.'(284-5)

ローズは罪の意識と悔悟の情を抱き、それを表す動作をする。それがアリスのところに生まれた新生児への投げキスなのだが、それはアリスには見えない。見えないが、彼女は彼女でローズとの仲を修復すべく、努力を続ける決意を表明している。しかし勿論それはローズの与り知らぬところである。結局のところ、ここでも心の通い合いは成立していないのだ。確かに相手に対する思いはどちらも positive なものである。だがそれも、当の相手を目の前にはしていないから冷静でいられるということかもしれない。それでもなお、二人がお互いに和解を求めようとしているという事実は、この、本質的には暗い作品の最後を、確実に明るいものとしている。

フォースターはこの小説を書いた後自分の小説に不満を感じて、伝記など小説以外の仕事も手掛けた。1979年から再び小説も書き出し、次第に彼女自身、自分の作品が——特にその家族の関わりと、母—娘関係の扱いにおいて——フェミニスト的であると認めるようになって来た (Skeels) という。また最新作 *Hidden Lives — A Family Memoir* (1995) ではフォースターは、彼女の母方の曾祖母からの四代にわたる女達の伝記を綴っている。それは Annie (曾祖母) や、Margaret Ann (祖母)、Alice (伯母)、Lilian (母) という具体的な一人一人の話であるとともに、同時代を生きた何千もの女達の歴史ともなっているようなものなのだ。そしてそこに描かれている母と娘たちは、葛藤しつつも愛し合い、いたわりあって生きている。また *The Seduction of Mrs Pendlebury* は作家にとって満足の行くものではなかったが、重要な意味を持つものであり続けた (Skeels) ということだ。そしてこの作品の最後のかすかな明るさは、その理由を物語っている。ローズの人生は、その閉ざされた狭さは決して彼女一人のものではない。そして女から女達へと手を差し伸べあい、沢山のローズたちやアリスたちは、男を経由せずに直接お互いがお互いを支えることを、少しずつ学びつつあるのだ。それがたとえ瑣末な日常的なケアを通してに過ぎないにしても、それがたとえばローズのように、それほど恵まれた人生を歩んで来たわけではない女にとっては、少し広い世界、少し明るい世界への初めの一歩となることだろう。これと似たことを語っているフォースター自身の言葉を *Hidden Lives* から引用して、本稿を閉じることにしよう。

Let no one say nothing has changed, that women have it as bad as ever.... for a woman is better now, even if it is still not as good as it could be. To forget or deny that is an insult to the women who have gone before, women like my grandmother and mother. (307)

#### 註

1. この小論は作品の紹介を主な目的とするものである。テキストは Margaret Forster の



*The Seduction of Mrs Pendlebury* (London: Penguin Books, 1974) を使用し、引用のページ数は文中に ( ) で示した。

2. ヴィクトリア朝の、家庭に閉じ込められて生きる女性の意識については拙論「女達の見果てぬ夢、または夫殺しの女達」参照。

## 引証資料

Bayley, John. 'The 'Irresponsibility' of Jane Austen'. Ed. B.C.Southam. *Critical Essays on Jane Austen*. London: Routledge and Kegan Paul, 1968.

Bradbury, Malcolm. *The Modern British Novel*. London: Secker and Warburg, 1993.

Connor, Steven. *The English Novel in History: 1950-1995*. London: Routledge, 1996.

榎本眞理子「女達の見果てぬ夢、または夫殺しの女達」『津田塾大学 言語文化研究所報』第十号 1995 年。

Forster, Margaret. *Lady's Maid*. London: Chatto and Windus, 1991.

\_\_\_\_\_. *Hidden Lives*. Harmondsworth: Penguin, 1995.

Fowles, John. *The French Lieutenant's Women*. Harmondsworth: Penguin, 1969.

岩崎正人 講演「現代社会における家族」東京 多摩保健所 1995 年 1 月 5 日。

Lodge, David. 'The Novelist at the Crossroads.' Ed. Malcolm Bradbury. *The Novel Today*. Glasgow: William Collins Sons & Co. Ltd., 1977.

Murdoch, Iris. *The Bell*. London: Chatto and Windus, 1958.

斎藤学『子供の愛し方がわからない親たち』東京 講談社、1992 年。

Sambrook, Hana. 'Margaret Forster.' Ed. Lesley Henderson. *Contemporary Novelists*. London: St James Press, 1993.

Skeels, Judith. 'Forster, Margaret.' Ed. Janet Todd. *Dictionary of British Women Writers*. London: Routledge, 1991.

スタイナー、ジョン「見て見ぬふりをする事」阿比野宏訳『imago』Vol. 5-9, 1994 年 8 月号。

Wilson, Angus. *No Laughing Matter*. Harmondsworth: Penguin, 1967.